

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻177号 令和2年(2020)8月17日 Vol.51 No.1



トピック展示「1万6千年前のセイウチ化石」

令和2年3月4日(水)～3月29日(日)に当館エントランスホールでトピック展示を開催しました。この展示で紹介したのは、津軽海峡から初めて発見されたセイウチの牙化石1点です。

この化石は、2年前の平成30年3月17日に風間浦村蛇浦の漁師・五十洲勇さんが津軽海峡でアンコウ漁を行っていた際に、網にかかったものです。当初、ナウマンゾウの牙ではないかということで当館に連絡がきたことから、ゾウ化石の研究者である滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一館長の協力を得て調査を行いました。

調査の結果、ナウマンゾウの牙ではないことがわかり、さらにセイウチの牙である可能性が高まり研究が進められました。研究には同館の水生動物研究者・松岡由子さんにも加わっていただき、最終的にセイウチの左上顎の牙であることが判明しました。また、炭素を使った年代測定も行い、1万6千年前の化石という結果が得られました。

現在、地球上に生息するセイウチ類は1種で、北極圏に分布しています。牙の形態だけでは種を決めることができませんが、この牙化石が現生の

セイウチのものと仮定した場合、1万6千年前の津軽海峡は北極圏に近い寒さであったことが考えられます。

現在は、寒冷な時期と温暖な時期が周期的に繰り返される氷河時代の温暖期に当たりますが、約2万年前は寒冷期のピークでした。その後、温暖化が進みましたが、1万6千年前頃に、一時的に寒冷化したことがわかっており、この寒冷化によってセイウチが津軽海峡付近まで南下してきたのではないかと考えられます。

化石は、泳いできた魚が網目に刺さるように張られた刺し網にかかりました。また、化石の表面には様々な付着生物が見られ、中には生きているものもありました。その中には水深の浅い場所に生息する二枚貝もあったため、化石は網にかかる前に浅い場所にあり、そこから海底斜面を転げ落ちて網にかかった可能性があります。

このセイウチの牙化石は、新しく収蔵された資料を紹介する展示会で再度、展示する予定です。

(学芸課長 島口天)

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策について

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、郷土館は1か月以上の臨時休館をしておりました。5月21日(木)に再開して以降、館内では、職員のマスク着用、手指の消毒液を館内各所に設置、お客様がお手をふれる部分のこまめな消毒など、様々な感染症対策を実施しており、お客様が安心して郷土館の展示をご観覧いただけるよう万全の態勢を心がけております。このため、大変心苦しいところではありますが、常設展示室の「わくわくたいけんルーム」をはじめとした、各展示室における、お客様が資料に直接ふれて楽しんでいただくような展示は現在休止とさせていただきます。例えば、右の画像にあるような、さわられる遮光器土偶(本物とまったく同じ大きさ!)や青森市出身の芸術家、鈴木正治の作品などには現在さわることができないのです。実際にさわってみると様々な感動があり、子どもから年配の方まで楽しんでいただくことができる資料でしたので、私も非常に残念に思っております。

もちろん、新型コロナウイルスの状況が落ち着いた際には改めて感染症対策を講じたうえで再開したいと考えております。その際は思う存分「さわられる資料たち」を楽しんでくださいね。

また、当館のホームページでは新型コロナウイルスに関連する、郷土館からの「お客様へのお願い」のほか、展示やイベントに関する最新情報を掲載しておりますので、ご確認のうえご来館いただきますようお願いいたします。

(TTHAグループ 櫻庭友輔)

りんたろう



年間の行事もいろいろと変更になったんだ！
最後のページで紹介しているよ♪

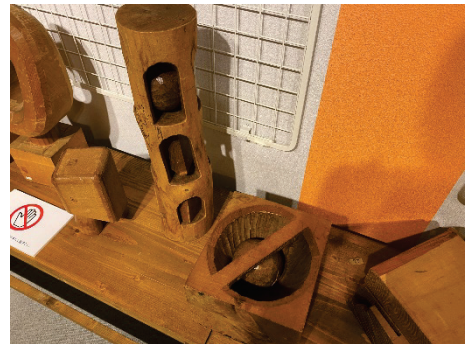
うつぶせで寝ているから、
今のうちに背中を見てね...

しゃこちゃん



背中におもしろい発見があるかも？

じっくり眺めてどんなふう
作られたかを想像してみよう



鈴木正治作品

休止している展示はほんの一部！
常設展示室は見どころ満載じゃ



つがるう

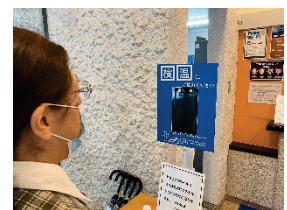
郷土館にサーモカメラが仲間入り

なんと！郷土館にサーモカメラが設置されました！ニュース等で様々な施設に設置されているのを見た方も多いのではないのでしょうか。もちろんこのサーモカメラの設置も上で紹介した新型コロナウイルス感染拡大防止のための取組のひとつ。来館されたお客様にはカメラの前に立って体温の測定をお願いしております。

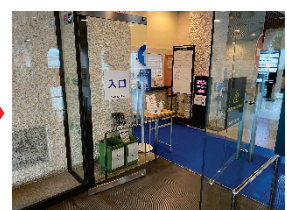
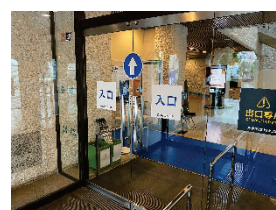
最新機器の登場に、来館したお客様は興味津々！これは、正面入口でいつもお客様を驚かせている「観音開き式の自動扉」と人気を二分させるのではないかと考えています。(この観音開き式の自動扉は、私は郷土館でしか見たことがありません)

ご来館の際は、このサーモカメラでの検温にもぜひご協力をお願いいたします。

(TTHAグループ 櫻庭友輔)



モニター一体型のサーモカメラ
セルフチェックでの検温をお願いしております



世にも珍しい「観音開き式の自動扉」
左右に大きく開いてお客様をお迎えます

臨時休館中の解説員

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休館としていた期間の解説員の様子をご紹介します。

解説員は、青森県の歴史や文化を書籍やインターネットを駆使して調べたり、学芸員による研修で、専門的な知識を学んでいました。わくわくたいけんルームでは、壁に色々な装飾を施したり、子ども達が喜びそうな折り紙作品を作ったりしていました。中でも、新型コロナウイルス感染症が早く終息するようお願いを込めて作った『アマビエの金魚ねぶた』は力作です。

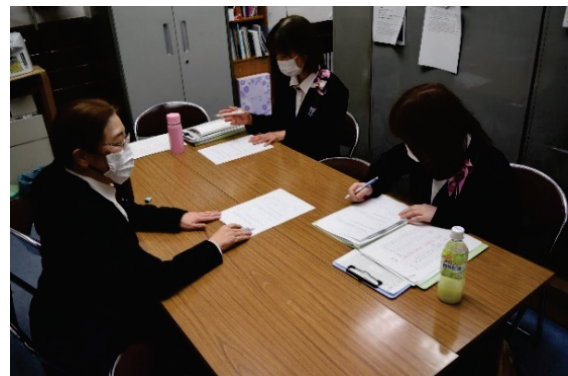
また、4月から仲間入りした新人2人は、英会話研修や展示解説の練習で、分きざみのスケジュールをこなしていました。受付では、先輩解説員をお客様に見立ててのシミュレーションや、書類作成の練習をしていました。お客様がいないこのタイミングで館内放送の練習も行っており、日に日に上達しているのがよくわかりました。

新人2人は郷土館での勤務が始まってすぐに臨時休館に入ってしまったので、平時の郷土館がわからず初めは不安そうにしていたのですが、先輩解説員の指導を熱心に受け、現在は立派な戦力として業務に励んでおります。

お客様に郷土館を楽しんでもらうための勉強は、解説員にとって日常業務の一部ですが、この臨時休館の時間を利用して充実した研修ができたようです。
(TTHAグループ 津島将)



アマビエの金魚ねぶた

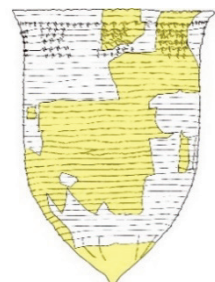


英会話を受講する新人2人(右)

考古展示室おすすめ「県重宝・隆起線文土器」

見慣れた展示資料も、違う角度から見ると別物に感じられます。右上段の写真は、一昨年東京国立博物館特別展「縄文—1万年の美の鼓動」で冒頭を飾った当館所蔵の名品、六ヶ所村表館(1)遺跡出土の県重宝・隆起線文土器です。常設展示室では右下段の写真のように陳列されているので、普段はこの土器の底に目は行きません。私自身、土器を撮影するときは全体の形が歪まないようにという指導を受けてきましたから、土器を横倒しで撮影する機会はありませんでした。細く低い粘土紐で文様が付けられていることが「隆起線文」の由来ですが、横から光を当てたことで低平な粘土紐が浮かび上がりました。胴部の粘土紐が水平に貼り付けられているのに対し、底部だけは縦区画となっていることがよく分かります。この土器が女性の乳房を模していると指摘する研究者もいますが、この角度で見るとそれもうなずけます。およそ1万3千年も前に作られたとは思えない見事な造形美です。本資料の現存部位は、右下段の図で黄色く着色した範囲です。思ったより少なく感じられるでしょうが、小破片で出土することが多い縄文時代草創期の土器の中では、口縁部から底部までが接合し、全体の形が明らかな数少ない例なのです。

(主任学芸主査 岡本洋)



行事予定のお知らせ

※新型コロナウイルス感染症拡大の状況により、
変更となる場合があります。

企画展 鎌田清衛写真展「青森の風土と人」

2020年9月4日(金)～10月18日(日)

TTHAグループ主催 第88回 東奥児童美術展

2020年10月30日(金)～11月8日(日)

TTHAグループ主催 金魚美抄2020～金魚を描くアーティストたち～

2020年11月14日(土)～2021年1月11日(月・祝)

TTHAグループ主催 第10回 東奥児童書道展

2021年2月10日(水)～2月28日(日)

【休館日】

8/24 9/3 10/19 10/29 11/9～13

12/29～1/3 1/12 2/9 3/1 3/12～17

特別展 蓑虫山人が夢みた「博物館」

次年度に延期いたします。

その他情報は**当館ホームページ**<<https://www.kyodokan.com/>>をご確認ください。

令和2年度土曜セミナー 講座一覧

マスク着用の上ご受講願います。予定は変更となる場合があります。

回	期日	テーマ	講師	
1	9月 5日	ハレー彗星の落し子たち ～常田健とその仲間～	工藤 清泰	G
2	12日	鎌田清衛氏の写真について	佐藤 良宣	学芸
3	19日	青森の擬態昆虫	工藤 忠	G
4	26日	縄文時代の集落と溝柵	根岸 洋	G
5	10月 3日	神に祀られた人々 ～秀吉から津軽為信・信政・信英～	篠村 正雄	G
6	10日	文化財の保存科学 ～土器の復元・修理方法～	白鳥 文雄	G
7	17日	鱒ヶ沢町赤石川みてあるき ～地学編～	川村 眞一	G
8	24日	青森県の考古学史 ～三内丸山以前～	福田 友之	G
9	31日	あそびの中に生きる原点をさがす	岩井 康頼	G
10	1月 16日	ハエ、アブ、カの世界	中村 剛之	G
11	23日	縄文時代の水場と貯蔵穴	杉野森 淳子	学芸
12	30日	新型コロナとねぶた	成田 敏	G
13	2月 6日	困難を克服してきた青森県民	中園 裕	G
14	13日	縄文遺跡を活かす保存・整備・活用 ～多様な分野の協力と手法～	一町田 工	G
15	20日	家々を訪れる名もなき神々	小山 隆秀	学芸
16	27日	青森市内の中世城館を歩く	成田 滋彦	G

※学芸…当館学芸課員 G…当館ゲストキュレーター

当館では、お客様に安心して展示を楽しんでもらえるよう、様々な感染拡大防止対策を行っています。



ホームページ



ブログ